

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381250

研究課題名(和文) モラル・アフォーダンスを導入した道德授業の開発

研究課題名(英文) Development of a Moral Education Method Introducing Moral Affordance

研究代表者

吉田 誠 (YOSHIDA, Makoto)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：60449957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：モラル・アフォーダンス獲得の道德授業から派生的に生まれた当事者研究的道德授業へと研究を展開することで理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の二軸平面に8つの道德授業方法を類型化して位置づける方法を開発した。この方法を発問分析に応用した授業改善に取り組むとともに、一つの教材について複数の観点から教材分析と指導案作りを行い、それぞれの授業方法のメリット・デメリットとその改善方法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：By developing research from the moral classes acquiring moral affordances to the moral classes based on the Self-study Meeting, we classify the eight moral education methods on a two-axial plane of idealism and realism, action principle and character principle. We applied the method based on the two-axis of idealism and realism, action principle and character principle to the question analysis for the improvement of the moral class. And we analyzed teaching materials and made teaching plans from multiple viewpoints. Thus, we clarified the advantages and disadvantages of each moral education method, and the method for improving the disadvantages.

研究分野：道德教育学

キーワード：道德授業の類型化

## 1. 研究開始当初の背景

本研究においてモラル・アフォーダンスとは場所や事象、他の人間などの環境が人間に提供する道徳的価値、あるいは人間の道徳的行為を促進したり抑制したりする環境的条件のことである。

我が国の道徳授業においては柳沼が指摘したように「国語科の授業に倣って、登場人物の心情を把握させることで価値の内面化や一般化を図ろうとする」心情把握型が主流となっている（柳沼良太「問題解決型の道徳授業の理論と方法」『道徳と教育』No.326、2008年、166頁）。心情把握型授業は道徳的価値が「わかればできるはず」とする考え方に基づいているが実際には子どもたちの道徳的実践に結びつかないことが多いという課題を克服できていない（吉田誠「トーマス・リコーナの人格教育と我が国の道徳教育との比較」『道徳と教育』No.326、2008年）。そこで研究代表者は、これまでに米国のトーマス・リコーナらの人格教育の中でも道徳的習慣形成の方法を我が国の学校現場の実態に応じて修正した日本型人格教育の方法を開発し、複数の道徳授業と学級会を連携させた形で実践を行い、検証を行った結果、ある程度の成果をあげることができた（吉田・村田「リコーナの人格教育に基づく道徳的習慣形成の方法の実践と検証」『道徳と教育』No.329、2011年、147-157頁。吉田・村田「道徳の時間と特別活動の連携によるアサーションの習慣形成」『道徳と教育』No.330、2012年、84-94頁。）。

しかし、これまでの実践において改善を図ったのは主として特別活動との連携の部分であり、道徳授業については従来の心情把握型授業を踏襲せざるを得なかった点が課題として残されている。また、道徳的習慣形成においては、周囲の人間関係や社会環境などの状況との関係で生

じる影響力が個々の行為への影響に比べてより大きくなるため、道徳的習慣の形成を促進したり、抑制したりする人間関係や社会環境などの状況に対する教師の配慮と子どもたちの自覚が重要となるがこの点についての理論的枠組が人格教育においては不明確な点も課題である。しかも、心情把握型授業は正しい意志や心情を持っていれば人は道徳的行動ができるはずという考え方を前提としており、理想とする道徳的人間は一つひとつの行為について正しい意志や心情に基づいて常に道徳的行動をとることができる人間、ということになる。この考え方に基づく指導を徹底すれば、心情把握型授業によって一つひとつの行為について他人事の正解探しや間違い直しにとられる「道徳的生活の微分化」の状態に陥り、教師も子どもたちも生活全体を通した道徳性の成長を見落とすことになりかねないという課題もある。さらに、「道徳的生活の微分化」に陥った人々は、人間の意志や行為が環境や状況から分離可能であるとする誤った前提に基づいて道徳的行動ができないのは意志や心情に原因があるとして非難や説教、罰によって意志や心情を矯正しようとする。このような状況では人々は、「何をすべきか」より「何をしてはならないか」ばかりを意識して人生の目的を見失ってしまう問題が生じかねない。（吉田誠「道徳的行為の教育から人格成長の共同体構築へ」『道徳と教育』No.331、2013年、146-156頁。）

このような問題を解決するために、人間の意志や行為は環境や状況から分離可能とする捉え方に対する代案として、ジェームズ・ギブソンが提唱した人間と環境や状況を相互依存関係で捉えるアフォーダンス概念を手掛かりに、アフォーダンスを道徳的な側面から捉えたモラル・アフォーダンス概念を我が国の道徳教育に取り

入れた道徳授業の方法と教材の開発を行うことにした。

## 2. 研究の目的

本研究では、まずアフォーダンス概念の道徳や道徳的行為への適用について検討することによってモラル・アフォーダンスの概念を明確にし、この概念を認識して生活することが道徳性や人格の形成にどのような意義をもたらすか検討する。その上で、道徳性の発達をモラル・アフォーダンスの習得と創造の観点から捉えなおし、子どもたちによるモラル・アフォーダンスの習得と創造につながる道徳授業の方法を検討する。そして、学校現場で実践を行った成果の分析と評価に基づいて道徳授業の方法の開発を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は大きく分けてモラル・アフォーダンスに関する文献研究・モラル・アフォーダンスの道徳教育教材の開発・モラル・アフォーダンスの教育方法の実践研究の三つの部分から成る。文献研究については、アフォーダンス概念の道徳や道徳的行為への適用についての理論的な考察を深めることでモラル・アフォーダンスの概念のさらなる明確化とモラル・アフォーダンスの習得や創造の方法に関する検討を行う。教材開発については、モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業に適した教材のあり方についての検討を行う。実践研究については、参加型アクションリサーチとグラウンデッドセオリーアプローチを用いて行う。

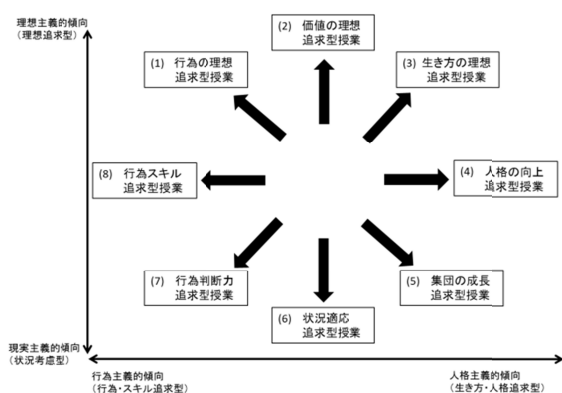
## 4. 研究成果

まず、文献研究からモラル・アフォーダンス

について、ある言動を取った場合にその後どのようなことが起こりうるか、についてのイメージである予期的意識を中心に検討を進めた。その結果、適切かつ多様な予期的意識を持つことで道徳的問題状況によりよく対応できる可能性が高まることを明らかにした。そこで、資料「手品師」について予期的意識の観点から教材分析を行い、学習指導案を作成した上で、道徳授業を実施した。この実践結果については、修正型グラウンデッドセオリーアプローチを用いて児童の発言を分析し、他の児童の発言やグループワークを通して児童の予期的意識が多様になっていくことを明らかにした。また、モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業において適切な教材は、より子どもたちの生活に身近な内容であることが望ましいが、教材に描かれた時間的空間的枠組みを超えた文脈で思考させることで予期的意識を多様に持たせる工夫をすれば「手品師」のような架空の話を教材として用いることは可能であることを確認することができた。

教材に描かれた時間的空間的枠組みを超えた文脈的な思考とアフォーダンスの関係について検討する中で、精神障害を抱える当事者が自らの問題行動を支援者と共に研究し、自らの問題との折り合いのつけ方を探る当事者研究の方法を道徳授業に導入することで、予期的意識をより長期的で個人と集団両方の成長の視点から用いることができるようになる可能性が開かれることを明らかにした。そこで、モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業から派生させた形で当事者研究的道徳授業の方法の開発を行った。これにより、個人の行為によって道徳的問題状況を即時的に解決する、という観点での思考に限定されがちであった従来の道徳授業に対して、より長期的な視野から集団で道徳的問題と折り合いをつける観点で思考させる授業方法を提示

することができた。さらに、モラル・アフォーダンス獲得の道德授業と当事者研究的道德授業の開発によって、筆者がこれまでに開発した日本型人格教育と既存の道德教育方法である心情主義的道德授業、価値主義的道德授業、人物の生き方から学ぶ道德授業、モラルスキルトレーニング、モラルジレンマ授業を併せて8つの授業方法があること、さらに、これらが理想主義と現実主義、行為主義と人格主義の二軸平面上に位置づけられることが明らかになった。そこで、それぞれの授業方法をねらいに基づいて類型化し、道德授業のねらいの8類型として提示した。



これにより、教材分析の段階からある程度ねらいを意識した分析と発問の構成を行うことができるようになった。さらに、各授業の発問も理想主義と現実主義、行為主義と人格主義の二軸平面上に位置づけることで授業改善を行う方法も開発し、教員研修などで利用できるようにした。以上の研究成果については、吉田誠・木原一彰『道德科 初めての授業づくり ねらいの8類型による分析と探究』(大学教育出版、2018年4月30日刊行予定)にまとめ、教員養成や初任者研修等で利用できるようにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

吉田誠「道德教育方法論における信念対立の克服に向けて」、『山形大学 教職・教育実践研究』第12号、2017年、29 - 36頁。

吉田誠「道德科におけるコンピテンシー・ベースの授業づくり」、『山形大学 教職・教育実践研究』第12号、2017年、11 - 19頁。

吉田誠・中川裕幸「モラル・アフォーダンス獲得の道德授業の提案(2) 多様で適切な予期的意識を持たせる実践とM-GTAを用いた分析」、『筑波大学道德教育研究』第17号、2016年、77 - 86頁。

吉田誠「問題解決的な学習としての当事者研究的道德授業の可能性と課題 問題解決型の道德授業との比較から」、『山形大学 教職・教育実践研究』第11号、2016年、69 - 78頁。

吉田誠「道德の時間における『語り』の子ども中心主義的転回」、『山形大学 教職・教育実践研究』第10号、2015年、1 - 8頁。

吉田誠「モラル・アフォーダンス獲得の道德授業の提案(1) 心理主義的授業と認知主義的授業の課題克服を目指した授業の構想」、『筑波大学道德教育研究』第16号、2015年、25 - 35頁。

〔学会発表〕(計5件)

吉田誠「道德科におけるコンピテンシー・ベースの授業づくり」日本道德教育学会、秋田公立美術大学、2016年10月23日。

吉田誠「道德教育方法論における信念対立の克服に向けて 理想主義と現実主義、行為主義と人格主義の二軸に基づく類型化」日本道德教育学会、聖徳大学、2016年7月3日。

吉田誠「問題解決的な学習としての当事者研究的道德授業の可能性と課題」日本道德教育学会、岡山大学、2015年11月22日。

吉田誠・中川裕幸「資料『手品師』を用いた

モラル・アフォーダンス獲得の道德授業の実践  
とM-GTAによる分析の試み」日本道德教育  
学会、高知大学、2014年11月30日。

吉田誠「モラル・アフォーダンス獲得の道德  
授業の構想 道德的心情と道德的判断力を育て  
る道德授業の課題克服を目指して」日本道德  
教育学会、昭和女子大学、2014年7月5日。

〔図書〕(計1件)

吉田誠・木原一彰『道德科 初めての授業づく  
り ねらいの8類型による分析と探究』大  
学教育出版、2018年。

## 6. 研究組織

研究代表者

吉田 誠(YOSHIDA, Makoto)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：60449957